

聖書：ヨハネの黙示録 21：1～4

説教題：新しい天と新しい地

日時：2021年10月10日（朝拝）

黙示録もいよいよ最後の2つの章を残すのみとなりました。おそらくこの21～22章は黙示録の中で最も読まれ、親しまれている箇所だろうと思います。その前の部分、1～20章は、様々な象徴的表現、黙示文学的表現が次々に出て来て、ただただ困惑する言葉の連続だったかもしれません。それに対して21～22章は、同じく象徴的表現が用いられていて細かい部分では分からないところがあるにしても、救いの最終状態について語っているのだらうということは分かります。最後のさばきがなされた後の新しい世界について語っているのは分かります。ここは神を信じる者にとっての究極的な望みを指し示す箇所です。今日はその最初の部分を見て行きます。

まず1節に「また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去り・・・」とあります。前回見た20章11～15節には最後の大審判の様子が描かれました。獣やサタン自身ばかりでなく、そのサタンの側につく者たち、神が与えてくださったキリストを信じず、これを拒否し、自分の罪をそのまま残した者たちに対するさばきのことが語られました。11節には「地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった」と言われました。こうして以前の天と以前の地は過ぎ去り、新しい天と新しい地の出現となります。

さてこの新しい天と新しい地すなわち新天新地は、それまでの天および地とどういう関係にあるのでしょうか。今、私たちが住んでいるこの世界はやがてすべて捨てられ、廃棄され、無に帰されるのでしょうか。信じる者たちは、今の世界と全く別の新しい世界に移されるのでしょうか。聖書の中にはそのように読める箇所もあります。代表的な箇所はペテロの手紙第二3章10節と12節です。そこに主の再臨の日について「その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまいます」とあります。12節にも「その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます」とあります。一見、この世界が焼かれて全部なくなることを暗示しているようです。しかし一方でやがての新しい世界は、今の世界との連続性があることを示唆する箇所もあります。代表的な箇所はローマ人への手紙8章19～22節です。そこでは被造物のすべてが将来の贖いの日を待ち

望んでいると言われていました。この世界は人間の罪のために呪われ、今は「虚無」と呼ばれる本来の輝きを失った状態にあると言われてはいますが、後は捨てられ、廃棄されるだけであるとは言われていません。むしろ罪人の救いとセットで、この世界も本来の栄光ある状態へ回復させられることが述べられています。確かに火で焼かれると表現される厳しい聖めのプロセスを経るかもしれないけれど、今の天地と新天新地には関連があると。このことは私たちの復活のからだを考えても同じです。やがて頂く栄光のからだは今の私たちのからだと大きく異なります。しかしそこにいる私は私です。今の私とやがての私には連続性があります。今の私が贖われて、やがて新天新地で生きる私となります。あるいはもし神がこの世界を全部捨てて別に新しい世界を造るとすると、それは神の負け、またサタン勝利を意味することにもなります。神はこの世界と人間を造り、最終ゴールへと導こうとされたのに、この世界を丸ごと廃棄したら、神の当初の計画は頓挫した、すなわち悪魔は神の計画を見事に妨害できた！ということになってしまいます。神は決してそうはさせない。確かに現在の天と地にはさばかれなければならない側面がありますが、やがての世界との間には連続性があるというのが聖書の主張です。しかしやがての世界は、ここに書いてあるように「新しい天と新しい地」と表現される世界です。この「新しい」という言葉は、性質的な新しさを表す言葉です。今の世からは考えられないほど新しい世界となることは確かです。罪の染みが一切ない世界は果たしてどんな世界になるのか。その世界はどんな輝きに満ちたものになるか、私たちには想像ができません。そのような新しい世界が現れるのです。

また1節に「もはや海もない」とあります。ある人はこれを聞いて残念に思うかもしれません。もうきれいな海の景色は見られなくなるのか。マリンスポーツはできなくなるのか。楽しい海の生き物を見ることはできなくなってしまうのかと。しかしそういう意味ではないと思われまます。この黙示録で海は人間にとって危険な場所、悪が潜む場所というイメージで語られて来ました。それは旧約聖書にも見られるもので、海はしばしば混乱あるいは人間にとって脅威的な場所というイメージで語られています。ノアの洪水もそうでしたし、出エジプトの際の葦の海（紅海）もそうでした。あるいはヨナも海に投げ込まれて死の直前まで行きました。このように人間にとって海は死と背中合わせとなり得る不気味で危険なところというイメージがあります。そして黙示録では何と言っても13章で、その海から獣が上って来ました。ですからこのように人々の生命を脅かし、不安にさせ、動揺させるようなものなくなるという

ことです。悪の要素がすべて取り除かれ、ただ平和と安全が支配するところとなるという意味でしょう。

さて2節でヨハネは、その新天新地に「聖なる都、新しいエルサレムが天から降って来るのを見た」とあります。この聖なる都、新しいエルサレムとは、贖われた神の民の共同体、一言で言って教会を指す表現です。旧約時代、エルサレムは神がそこに住まわれた聖なる都でした。荒野を旅するイスラエルに神は申命記 12 章 5 節でこう言われました。「あなたがたの神、主がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ばれる場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。」そしてソロモンはエルサレム神殿の奉献の際、かつてダビデに主が語られた言葉を列王記第一 8 章 16 節で次のように引用しました。「わたしの民イスラエルをエジプトから導き出した日からこのかた、わたしは、わたしの名を置く家を建てるために、イスラエルの全部族のうちどの町も選ばなかった。わたしはダビデを選び、わたしの民イスラエルの上に立てた。」そして 29 節でこう祈りました。「この宮、すなわち『わたしの名をそこに置く』とあなたが言われたこの場所に、夜も昼も御目を開き、あなたのしもべがこの場所に向かってささげる祈りを聞いてください。」人々はここで神に近づき、罪の赦しを受け、祈りをし、ささげものをささげました。このようにエルサレムは神が特別にご自身の御名を置くと言われた神の宮がある都であり、神に近づき、神を礼拝し、神を喜ぶ神の民の共同体を象徴する町でした。それはやがてキリストにあって全世界の民が神を礼拝し、神を喜ぶ天上のエルサレムを指し示すものでした。ヘブル人への手紙 12 章 22～23 節：「しかし、あなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都である天上のエルサレム、無数の御使いたちの喜びの集い、天に登録されている長子たちの教会、云々」。このように地上のエルサレムが指し示して来た聖なる都の完成形、全世界の主を信じる人々からなる神の民の共同体、新しいエルサレムが現れたのです。

それが天から降って来るのをヨハネが見たとあります。ここにはどういう意味があるでしょう。それは新しいエルサレムはただただ神の恵みの御手のわざによるものであるということでしょう。対照的なのは創世記 11 章のバベルです。人々は人間の力で頂が天に届く塔を建て、名を上げようとしていました。しかし神は高慢に突き動かされた人間の試みを言葉を混乱させて打ち壊されました。しかしこの聖なる都、贖われた神の民の共同体である新しいエルサレムは神の手による作品です。神がこれをこしら

え、組み立て、成長させ、ついに完成に至らせた神の作品として、それは神のみもとから、天から降って来たのをヨハネは見たのです。

またその姿について「夫のために飾られた花嫁のように整えられて」ともあります。「都」あるいは「町」が「花嫁」とも表現されているのを聞いて、多少混乱を覚える方もいらっしゃるかもしれません。しかしこれはあくまで象徴的表現ですから、その意図するところを受け止めるようにすべきです。教会はあの旧約時代のエルサレムが指し示したような、神のみそばにあり、神を中心とし、神を喜ぶ共同体です。しかしそれはさらに主との関係において主の花嫁だと言われているのです。すでに花嫁のイメージは19章7～9節に出て来ました。そしてこの後、21章9節に、その「花嫁を見せましょう」という御使いの言葉が出て来ます。神の民・教会はただ神がその中心に住まわれる特別な町の市民というだけではない。何とその神を夫として持つ花嫁でもあるのです。主なる神と結婚関係にまである者たちなのです。ここには「都」や「町」のイメージにより勝る「親しさ」「愛情」「喜び」「楽しみ」というイメージが加わりません。教会はそのような祝福に生かされる者たちなのです。

今日最後に見るのは3～4節に記されている、ヨハネが聞いた御座から出た大きな声についてです。まず3節：「私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。『見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。』」神がともにいるという祝福は創造当初のエデンの園にはありました。神は人とともに住み、人は神にあって豊かな満たしを受けて歩んでいました。しかし人間の罪によってこの交わりは失われました。しかし神は救い主の約束を与えて、荒野では幕屋を通して、また約束の地では神殿を通してご自身がともにご自身を指して、宮より大きなものがここにいると言われ、そして神殿は神が人々とともにいることの象徴でしたが、イエス様は「神は私たちとともにおられる」というインマヌエルなるお方でした。また人々は神殿にやって来て神に近づき、神を礼拝しましたが、イエス様は今や人々が神を礼拝するの

はあの山やこの山ではなく、ご自身においてであること、ご自身こそ神に近づく真の道であると話されました。その方は地上でのみわざを成し遂げて天に上り、ペンテコステの日に天から聖霊を注いでご自身と教会を結ばれました。そのことにおいて今や教会が神の神殿であると新約聖書では語られています。新しいエルサレムはその最終完成形です。幕屋や神殿はごく一部の人が中に入れるだけでしたが、やがての新天新地では神の幕屋がすべての民とともにあります。神は彼らの神として、ご自身を豊かに分かち合ってください、あらゆる必要を満たしてください。しかも私たちの想像をはるかに超える十分過ぎる恵みをもってです。

このような肯定的な祝福とともに、4節では否定面から全ての苦しみとフラストレーションが除かれるということが言われます。「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」この世にあって私たちは涙することも多い毎日です。色々な苦しみ、悲しみがあります。その中には自分の罪ゆえのこともあります。自業自得の苦しみによる涙もあります。またそうでないものもあります。肉体的病、精神的病、自然災害によるもの、経済的な苦境、・・・あるいは他人から与えられる苦しみもあります。暴言、傷つけられるような言葉、不条理な扱い。また信仰に生きるがゆえの困難・迫害など、・・・しかしそういう中で主に信頼して主の道を歩み続けたゴールにおいて、神は私たちの目から涙をことごとくぬぐい取ってください。これは「すべての涙を」という意味です。最後の一滴まで、そのようにしてください。神は私たちを悩ませて来たすべての悪を永遠に過ぎ去らせてくださるからです。もはや死もありません。私たちをこの世でいつも脅かして来た最後の敵が滅ぼされて、なくなります。また悲しみも、叫びも、苦しみもない。そのようなことは新しい天と新しい地には一切ないのです。私たちは神に目の涙をぬぐい取っていただく資格などない者たちなのに、神は私たちを愛し、ついに約束の最終的な救いの状態に導き入れて、私たちの涙をぬぐってくださいなのです。イザヤ書 25 章 8～9 節：「神である主は、すべての顔から涙をぬぐい取り、全地の上からご自分の民の恥辱を取り除かれる。主がそう語られたのだ。その日、人は言う。『見よ。この方こそ、待ち望んでいた私たちの神。私たちを救ってください。この方こそ、私たちが待ち望んでいた主。その御救いを樂しみ喜ぼう。』」

以上、新しい天と新しい地に関する最初の部分を読みました。聖書はこういう将来

が来る！と私たちに告げています。今日の箇所は良く葬儀において読まれる代表的な箇所の一つだと思います。死の先にはこのような将来がある！と。しかしこれは葬式の時だけでなく、地上の生活においていつも私たちが覚え、見つめているべき約束でしょう。この世にあって日々私たちは戦いの中にあります。日々涙があり、悲しみがあり、叫びがあり、苦しみがあります。しかしこれらが一切存在しない新しい天と新しい地が来るのです。神が私たちのすべての目の涙をふき取り、永遠にご自身が私たちの神として、ともにいて祝福くださる最終的な救いの完成の日が来るのです！この日を見つめて、困難な戦いの中でも主への信仰を告白し、主に従い続ける歩みへ励まされたいと思います。神は必ずご自身の目的を果たされます。主にあつて神を信じる者はやがて新天新地でこの十分な神の祝福にあずかります。いかに今、厳しく、つらい日々を過ごしているとしてもです。この聖書の約束、神の約束に慰められ、励まされ、力を得て、この日を待ち望む歩み、この日につながる今日の信仰の歩みへとこの週も強められて行きたいと思います。